

ています。

お母さんたちは、涙を流しながらお互いの思いを打ち明けるのですが、今年は去年とは違って、前向きさというか、たくましさを感じる場面もありました。「毎日毎日、次々と原発を巡って大変なことがわかり、3・11前の暮らしを返してよ！って、何度も思う。だけど、生活は続いていく。だから、今できる最善のことをやっていこうね」と。決して状況は楽にはなっていないけれど、そうやって励ましあう表情に、少しだけ、光が見えた気がしたのです。

「線量が低いから」と 痛み比べをしない

被ばくによる健康リスクを下げるためには、保養が効果的であることも、チエルノブイリの経験から明らかになっています。保養とは、一定期間、汚染のない地域で過ごすことにより、体内の放射性物質を排出させ、免疫力を高める取り組みです。私たちも、夏休みに、子どもたちを各地へ保養に連れて行ったり、保養に出かける方に交通費の補助を出したり、積極的に保養を勧めています。

ある時、子どもを保養に出すのをためらうお母さんがいました。理由を尋

ねると、「会津には、多くの避難者の方たちが生活していて、本当に大変な思いをしてきた。だから保養は、避難者が優先だと思うんです。家族が離れ離れになることもなく、ずっと会津に暮らしている私の子どもは、遠慮した方がいいのかって」というのです。

「福島県内では比較的線量が低く、安全」とされる会津で子育てをする母たちの、複雑な胸の内です。

でも、忘れてはならないのは、ほかの地域と比べて汚染度が低いとはいえ、会津にも、事故前よりずっと高い放射線があるという事実です。これは、加害者が起こした事故によってできてしまった事態なので、被害者同士が痛み比べをする必要はないはずです。

日々の暮らしの中で、自分や自分の子どもに被ばくをさせたくないという、その当たり前の思いを行動にうつすことを、誰も我慢しなくていいのです。そんなことをしていたら、やがてみんなが口をつぐまなくてはいけなくなる。それでは、子どもたちの命や健康を守ることができません。

無用な被ばくを避ける権利は、誰もが当たり前に持っているのです。このことは会津に限らず、県境を越えて広がった低線量汚染地域に暮らす方々にも、心に留めておいてほしいと思います。

徹底的な絶望から 始まるものがある

私たちの活動の根底には、もはや、国に自分たちの生命を預けない、という決意があります。

国への不信感を決定づけたのは、事故後早い段階から、福島県内各地で開かれた、放射線の専門家による講演会です。そこでは、「放射能は笑っている人のところにはきません」「年間100ミリシーベルトまでの被ばくなら、影響はほとんどありません」など、被ばくの影響を過小評価する話ばかりがされました。衝撃的だったのは、「今は国家の緊急時だから、国民は国家に従うべきだ」という発言です。科学者が語る精神論に、背筋が凍る思いがしました。

原発震災から約1年後、「国や県は味方だと思っていた。今は緊急時だから、国が助けてくれると思っていたのに、現実とは違った」と話すお母さんがたくさんいました。緊急時に、国は国民を守らない。

それは、旧満州からの引揚者である私の母がよく語っていたことです。戦争体験者である母の言葉と、原発事故を経験した私たちの言葉が重なることが、とてもショックでした。

結果的に、専門家の口から被ばくの発を見てパニックになり、逃げてしまったのです。

牧師の両親のもとに生まれ育ち、結婚後は牧師の妻として生きてきた私にとって、自分が教会を守る役目を投げ出すような人間であると認めるのは、とても苦しいことでした。ただただ、自分の弱さが、恥ずかしかった。

お腹の底からわきあがるような恐怖を感じて避難したのですが、避難中は、私は弱くてずるい人間だから逃げ出したと思っていました。しかし、自宅に戻り情報を収集し、同じく不安を持つ人びとと繋がっていくうちに、避難者は弱さから避難したのではないことに気づきました。原発事故に遭遇したら、生命を守る唯一の選択が避難だと知ったのです。

事故直後、原発の危険性を熟知していた友人は、知り合いに警告を発し、いち早く避難しました。そのことは、私の避難意識を高め、避難を後押ししてくれたのです。そして、私の逃げる姿を見て避難に踏み切った友人や知人もいました。とはいえ、家族や友人を置いて避難することは本当に辛い。一時でもその思いを経験したことで、決して充分ではありませんが、会津に避難